

中期親子関係における母娘関係についての一考察

- 母親の主観的な語りを通して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
吉田 真理子

高齢化に伴う親子関係の長期化によって親子関係研究の概念として中期親子関係が新しく登場したと(春日井, 1996)。中期親子関係期間における子の自立とその受容、母親の子離れ・役割再編はどのようにおこなわれていくのかについて、本研究では、娘を持つ母親を対象に、母親の主観的な語りから現代の中期親子関係にある母娘関係の相互作用と母親の役割再編に焦点を当てながら現状を描き出すことを目的とした。

方法は、成人した娘を持つ中期親子関係期間にあると思われる母親に対して、母親から見た娘との関係と関わり方、娘との衝突・分離経験とその解決方法についてたずね、協力者とその娘の関係に関する内容の自由度の高い半構造化面接を行った。分析としてはインタビューの内容を文字化してエピソードを時系列にまとめ、娘が小さい頃と思春期、中期親子関係のエピソードを図示し比較分析した。

結果と分析としては、各家族において前期親子関係期間から中期親子関係期間への移行段階で、それまで養育者として母親から娘へと言うかかわりが強かったのに対して、娘のライフイベントなどをきっかけに娘との相互作用が複雑化し、母から娘へ関わる対応が養育者としての「干渉」と、対等な関係として認め「見守る」という相反するパターンが同時存在するように変化が起きた。娘の自立に伴い、この「見守る」パターンがより増加する傾向にあった。役割再編については、娘の自己決定や娘の反発など、娘主体の行動により、母親としての影響力の縮小を実感し、母親役割の縮小が起きていた。その後娘に対して自己決定を尊重し、養育者としてだけでなく対等な関係として娘を「見守る」対応が見られ、母親役割からの役割再編が完了していった。

考察としては、前期親子関係での発達課題であった娘の自立に伴う相互作用の複雑化や、役割再編などが、前期親子関係期間の思春期で見られる母娘もあったが、中期親子関係でも見られ、自立という発達課題の長期化という可能性が示唆された。役割再編に関しては、娘のライフイベントによって急激に起こる役割再編と、娘との相互作用からゆるやかに起こる役割再編があることが示唆された。

この相互作用の複雑化と役割再編の要因として、周囲の意見の取り入れという家族外の他者の受け入れ、自分と娘との時代の照合という、時代差による娘との分離観、影響力縮小の実感による親役割からの離脱意識(母親役割の縮小)が本研究から浮かび上がった。